

第16回南のシナリオ大賞

大賞

ちりんとくん

青木ドナ

「ちりんとくん」あらすじ

野菜を刻み、熱い鍋で炒める。

「招福飯店」のコック、松田健太（34）は店主からラブレターが来た、と手紙を渡される。がそれは行方不明の姉からで、甥・松田雄大（6）が待つ場所のみが書いてあった。初めて会う甥は博多訛りっぽい言葉話し、人懐っこい。しかし、松田は確執ある姉との関わりを嫌い、子供を一刻も早く警察へ連れて行き手を切ることに考えない。

その晩、自宅に泊めた雄大が風鈴を外に出して隣人が怒鳴り込んできた。雄大は大人の怒声に怯えるが「ちりんとくん」と名付けた風鈴を抱くと何もなかったように眠る。

翌朝、雄大は風鈴と共に姿を消していた。松田はその時やつと、自分の言葉で必死に話しかけていた幼い雄大の心の内側に気が付く。帰宅した雄大と向き合う努力を始める松田。冷蔵庫を開けると、そこにはいつの間にか雄大の「ちりんとくん」が吊るされ、居場所をみつけたように揺れていた。

（おわり）

松田M「SNSを始めたら、古くて小さな『招福飯店』にもイイネが来た。店長は厨房で鍋を振る俺の写真までアップしたようだ」

松田「松田戻りました。店長、交代します」

林「あ、松田健太様へ、ラブレターね」

恵津子「ネットを見たって。少し前に女性が」

松田「え、手紙？　なんで俺なんかに――」

林「きっとネットでお嫁さん見つかるよ」

松田「絶対あり得ませんって（照れる）」

手紙を開く。

松田「えつと、ネット見たよ、ご活躍だね」

コインランドリーに息子がいます。（怖い

声）奥さん、コインランドリーって？」

恵津子「出て左、すぐの角を右、三軒目」

松田「あの疫病神がつ」

登場人物

松田健太（34） 「招福飯店」コック

松田雄大（6） 健太の甥

林 偉男（75） 「招福飯店」店主

林 恵津子（67） 店主の妻

隣人（52） 松田の隣室の女

飛び出していく。

炒飯を作っている。

林 「何か変だね？」

雄大 「ケンタ、なんしよう？」

恵津子「手紙、見ちゃおう。コインランドリー

松田 「え、おまえの炒飯作ってるんだよ」

に息子がいます。松田雄大六歳 健太の甥だ

雄大 「炒飯好き。あ、野菜のスープは要らん

よ、仲良くね、だって、お父さん！」

よ。おばあちゃん、なんしよう？」

林 「アイヤ、大変だ！」

恵津子「ダメダメ、小さい子は厨房をうろつく

んじゃないよ。火があつて危ないだろ」

大型洗濯機が回っている。

松田 「ほら、そこで大人しく食べるんだ」

雄大 「わかった、ケンタ」

松田 「（奥へ）姉貴、いるのか」

松田 「それと俺のことはおじさんと呼ぶん

松田M「巨大な洗濯機が並ぶその隅で黒い影

だ」

が動き、水色のTシャツ、色黒な顔に、への

雄大 「変だよ、ケンタはママの弟なのに」

字口の男の子がゆっくり出て来た」

松田 「何が変なんだよ」

雄大 「おじさんが、ケンタなの？」

雄大 「おじさん っていうのは たたのおじさ

松田 「ケンタ？ ああ、松田健太だけど」

んで、ママの弟はケンタだよ」

雄大 「ケンタ、なんしよう！（泣く）」

松田 「そうだけどそうじゃなくて、えっと」

松田M「豪快に泣き出した博多訛りっぽい男

林 「先ず、炒飯食べるね。旨いよ」

の子。彼が姉の息子、雄大だった」

雄大 「うん（食べる）旨い」

林 「松田君、この子と初対面？」

恵津子「兄弟仲、あまり良くないの？」

松田 「最悪です。姉は母の前の夫の子で、二

十歳の時、家出して十六年間音信不通で、

お互い居場所も知らなかったのに——」

林 「ネットで松田君を見つけたのか」

恵津子「手紙に事情も連絡先も書いてないし、

あの子、荷物もないんだよ。ひどい親だ」

松田 「あの姉のやりそうなことですよ」

恵津子「子供、親御さんに頼めないの？」

松田 「母が病死してすぐ、姉は父とぶつかり

家出したんです。父は必死に行方を探し続

けました。その父も六年前に。父は姉に殺さ

れたんだ、と俺は思っています」

林 「（小声）あの子寝ちゃったよ」

松田 「まったく、炒飯半分も残しやがつて。す

みません。あれは俺が払いますから」

恵津子「いいから。でも 母親がいなくてもよく

話すし、懐っこいし。強い子だね」

松田 「母親に似て面の皮が分厚いんですよ」

客が入店して、チャイムが鳴る。

き、片付けや明日の仕込みを整えると夜の

十時をかなり過ぎていた」

風鈴の音がする。

恵津子「いらっしやいませ」

恵津子「ご苦労さん。あの子、お風呂に入って

林「奥へ運んで寝かせて。で、松田君はこ

また寝たわ。今、来るからね」

松田「おい、そのガラスの風鈴どうした」

の子預かるの？」

松田「今日はご迷惑をかけました。俺、これ

雄大「赤い風鈴 おじいちゃんの、ほづき

松田「無理です。俺、姉には一切関わりたく

から警察に行つてきます」

鉢にくつついてたの、もらった」

ないんで、警察に行つて相談します」

恵津子「——松田君、警察行つて大丈夫かね」

松田「まさか、ねだつてないだろうな」

林「お母さん、迎えに来るといいね」

松田「え？」

雄大「風鈴が好きなの、つてきくから、う

恵津子「お客さんだよ、酢豚定食、一丁」

恵津子「お父さんが風呂に入れたら、この子、

ん、つて言つたらくれた」

林「はい、今行くよ」

あちこちに青あざがあるつて。こんな遅い時

松田「(舌打ち) 迷惑かけんなよ、俺が困る

松田「俺が行きます。もう上がつて下さい」

間に親でもない男の人がそんな子供を連れ

んだ。お礼は言つたのか？」

林「いや、今日は帰つていいよ」

て行つたら——」

雄大「ありがとう、言つたよ」

松田「店長、ぎっくり腰再発しますよ。いつ

松田「疑われて、俺が逮捕とか——」

松田M「迷いなくまっすぐ警察に向かう。子供

も通り夜は休んでください」

恵津子「うちも客商売だから、面倒は、ね」

は大人しくついて来るだろうか」

林「ハオア、じゃ、子供は見てるよ」

松田「——はい、わかつてます」

恵津子「色々あると思うけど、行く前にき、よ

歩くと風鈴が揺れる。

続々とお客が入店する。

く考えなさいね。ボク、おやすみ」

急に賑わう店内、食器の音

雄大「(眠い) バイバイ、おばあちゃん」

松田「その音で、昔のことを思い出したよ」

松田M「俺は無言でお辞儀をし、子供を促し、

雄大「昔のこと？」

松田M「夕飯のピークタイムのお客さんをさば

夜の道を歩きだした」

松田「田舎にいた頃、軒下に吊るしてあつて

うちからいつも風鈴の音がしてた」

雄大 「風鈴鳴つてるとこ、が、うちだね」

松田 「それで思い出した。お前のママさ、子供の時黙って一人で出かけて、夜まで遊んでいて迷子になったんだぜ」

雄大 「えー、ママ、どうしたの？」

松田 「風の強い日で風鈴の音がしていたから、うちに帰れたんだ。でも、心配した親が叱つたらさ、お前のママ、突然、思いっきり俺をひっぱたいて逃げやがった」

雄大 「ケンタ、痛いね」

松田 「理由なくぶたれると、特にな」

雄大 「あ、パトカーだ」

パトカーがサイレンを鳴らし、通り過ぎる。

松田M「急にピタリと足が止まる。目指す警察はもうすぐそこだというのに」

雄大 「ぼく、今日どこへ行くの？」

松田 「今夜だけうちに泊めてやる。あそこのコンビニの上、3階だ」

雄大 「♪（可愛い即席の歌）ケンタのうち3階、1階はコンビニだ」

松田M「子供が可愛いなどと思える気持ちが一ミリも理解できない。姉と同じ真つ黒な遣伝子が、俺の中にも半分あるからだ」

コンビニに入る。

雄大 「ケンタ、コンビニで何買うの」

松田 「朝飯のパンとビール三本」

雄大 「ケンタ、ビール三つも飲むの」

松田 「一本飲んで、残りは冷蔵庫。機嫌取りにプリン買うか。プリンは――」

雄大 「（即答）プリン大大大好き。あばく、ほら、五百円だけある」

松田 「俺が買うから、お前の金はしまえ」

雄大 「なんで飲まないビールも二つ買うの」

松田 「（面倒）好きなものを入れておくと

冷蔵庫を開けた時、気分いいからだよ」

雄大 「へえ、そうなん？」

松田 「お前の言葉、面白いな。今までどこに住んでたんだ？ 博多の近くか？」

雄大 「――ママが誰にも言うな、って」

松田 「じゃ、聞かないよ。どうせ俺には関係ないし（会計する電子音）」

シャワーを浴び、水を止める。

しつこくインターフォンを鳴らし、ドアを猛烈に叩く音がする。

隣人 「（怒鳴り声）松田さん 松田さん！」

松田 「（ドアを開け）あ、お隣の――」

隣人 「（怒鳴る）松田さん、夜中に風鈴なんか外に出さないですよ。うるさくって全然眠れないんですけどっ」

松田 「風鈴？ そんなもの――。あ！」

ドスドスと部屋に入る。

ばっていた」

松田 「(怒鳴る) お前、なにした?」

雄大 「ぼ、ぼく、してないよ」

シユの空き箱にタオルを入れて、ほら、そいつを寝かせて、近くに置きな」
雄大 「ちりんとくん 一緒だね(寝落ち)」

窓を開ける。

隣人 「気をつけて下さいよつ、ったく」

子供の深い寝息。

風の音、風鈴の音が入ってくる。

玄関のドアが閉まる

松田 「マジ? もう寝たのかよ(ため息)」

松田M 「風にあおられ、赤い風鈴がピンチハン

ガーの中で激しく踊っている」

松田 「隣のおばさん、もう帰ったぞ」

目覚ましが鳴る。

松田 「都会の風鈴は、外で鳴らしたらいけないんだっ」

雄大 「——ケンタ、ぶたないで」
松田 「こんなことで、ぶつかよ」

松田 「おい、朝だぞ、起きろ」

乱暴に風鈴をむしり取る。

雄大 「絶対嘘な気がする」
松田 「(ため息) プリンでも食うか?」

松田 「風鈴もないな、外に持って出たのか」

松田 「お前の口で隣のおばさんに、ごめんなさいって謝れ——、おい、どうした?」

雄大 「要らない。冷蔵庫に入れとく」
松田 「じゃ、もうその布団で寝な」

窓を開ける。

雄大 「(震える小さな声) ごめんなさい。ぶたないで、ごめんなさい」

雄大 「ぼくのちりんとくん、は?」
松田 「ちりんとくん?」

強い風が吹き込む。

松田M 「身をぎゅつと小さく丸め、頭を抱え込み震えている。小さな手は白く、固くこわ

と、ぼく絶対寝れない」
松田 「ったく。風鈴が壊れるからこのティッ

したままだったら、風で——」

(松田の想像)

風に卷かれ、激しく鳴り続ける風鈴。
風鈴にひびが入り、粉々に割れる。

松田M「突然、初めて会った時の雄大の顔が胸にさしこんできた。あいつはあの時から渦巻く風の中にいて、だから——」

松田「探さないと。は、警察に電話、携帯、携帯どこだ？」

家のものを激しくひっくり返す。

松田「(雄叫び) 何で無いんだよっ」

玄関ドアが開き、閉まる音

雄大「トイレの紙やる。ぼく、下のコンビニで

買ってきた」

松田「(大声) (変な博多訛り) な、なんしよつと、雄大は黙って出ていったら、心

配するだろうッ」

雄大「(笑う) 違うよ、『なんしよつと』や」

松田「そ、そうか。目玉焼き食うか？」

雄大「食う。あ、プリンも食べたい」

松田「よし、手を洗って来い」

冷蔵庫を開ける

ちりんと風鈴の音

松田M「風鈴が卵ラックに下がっていた」

松田「何で冷蔵庫の中に——」

雄大「あのね、ちりんとくんも一緒にそこに

いていい？」

松田「いいよ。なかなかいい場所だな」

松田M「風鈴はキンキンに冷えている。俺は

そつと、卵を3個取り出した。ちりんとくん

がクスッと笑うように、一度揺れた」

風鈴、かすかに鳴る。

(終)